

保育園・幼稚園・施設実習における問題事例の整理と

今後の指導のありかたの考察

—小学校教育実習の開始を控えて—

児 嶋 直 也

摘要：名古屋経営短期大学では2014年より小学校教諭養成を開始した。当初の計画では2016年に最初の教育実習を実施することになっていたが、参加適格者の不在等の理由で、2017年度が小学校での教育実習初年度となる。

本学においては、小学校教諭2種免許を幼稚園教諭免許と併せて取得することとしている。該当の学生は2年生時（本学子ども学科は3年制をとっている）に幼稚園での教育実習を受けている。この経験を生かして小学校教育実習に参加する。また、施設と特別支援学校での経験をするようになるが、これは本学科にとっても（学生にとっても）初めての経験となる。

しかし、子ども学科としてはこれまでに幼稚園、保育園、施設実習を行ってきた経緯があり、その実績と反省の上に立って指導することになる。そこでこれまでの事例について、保育実習を担当する教員に聞き取り調査することで予想される課題の整理を行う。その上で課題を解決する方策を考察し今後の研究の方向を検討することとした。

キーワード 教育実習 観察記録 活動記録

1. はじめに

本学では実習参加を重圧に感じている学生が多い。準備、手続き、記録、実技、実務などについての不安が大きく、強い緊張感を抱いて実習に参加する様子が見受けられる。

それは初めてのことであるため当然のこととも考えられるが、実態としては経験を重ねる中で不安が軽減していくわけではない。たとえば幼稚園保育園コースの場合、2年生で幼稚園に2回、3年生で保育園に2回と施設1回と計5回の実習があるが、そのたびに緊張度が高まっていく学生も散見される。経験を重ねる中で自信を深めていく学生もいるが、問題事例が減っていくわけ

ではない。

幼稚園小学校コースの場合、2年生で幼稚園2回、3年生で小学校1回、施設1回、特別支援学校1回と、保幼コースの学生と同じく5回の実習に参加することになる。小学校での実習が4週間（幼稚園、保育園での実習は、2回各2週間）であることで気力や体力の維持管理が出来るかどうか心配される。

そこで、以下に保育園幼稚園実習の各ステージにおいて、これまでに報告された問題点について整理する。さらに、重圧感の軽減と、保育者教育者としての力量の向上にむけて、どのような方策を取ればよいのかを検討した。

2. 実習前に学生が得ている情報あるいは自分の経験からの情報

学生はまず「先輩の（実習）経験を聞く報告会」で、情報を得る。そこでは次のような話題が多い。「実習先の方針や人間関係がなじめなかった」「記録を書くのに深夜までかかった」「指導案の作成や教材の準備などができない」など。こうした情報は聞く者に予断を抱かせる。そうして実際の幼稚園実習において苦勞することがあると「先輩の言っていたことは本当だ」と思うようになり、さらに3年時の保育園実習に過度の恐れを抱くようになる。結果、苦勞話や園への様々な批判が「経験談」として語られる。まさに負のスパイラルである。

こうした「マイナス情報」の多い報告会だが、会をやめればよいというものではない。なぜなら会を持たなくても噂話や苦勞している先輩を目撃することによって情報を得ているからである。

会の話題の立て方を工夫して「うまくいったこと」「こうすればもっとうまくいっただろう」というように、建設的な反省をもとにした発表が望ましい。例えば、楽しかったこと、有意義だったこと、うまくいった記録や指導案の書き方、準備しておくの良い事柄などを具体的に伝えてもらう。また、うまくいかなかった場合でも例えば「ピアノが弾けなくて困った」ではなく「もっとピアノを練習しておけばよかった」と言い換えられる。さらに「ピアノを弾けなくて先生に厳しい目で見られたが、子どもたちは楽しんでくれたので、もっと練習したい」というように経験を未来に繋げるような話題に転換するようにしたい。

そのためには、考え方の転換を図る必要があり、日ごろの指導の中で「プラス思考」が持てるような指導の工夫が必要である。それは保育教育の現場において、子どもを援助教育する場合に大切な考え方でもある。

3. 実習にかかる問題点

(ア) 電話で事前訪問の予約をとる場合に、電話のかけ方の問題がある

(イ) 事前訪問

①遅刻しないための訪問の時刻の守り方を知らない。下見や朝の交通状況についての準備不足。

- ②服装、身だしなみ、あいさつなどの不適切。
- ③「教えてもらえなかった」という不満。何を聞かなくてはならないかを事前に整理する方法。
- ④希望の伝え方（何歳児のクラスか、何年生か）、メモの取り方。聞くべきポイント。
- ⑤給食費の払い方、請求されないと意識できないという問題。
- ⑥クラスの特徴的な子どもについての理解。情報漏えいとコンプライアンス意識の欠如。
- ⑦ピアノ曲がたくさん要求される。あるいは示されなくて戸惑う（ピアノについてのコンプレックスの大きい学生にとっては、大きな心理的負担である）。

(ウ) 一か月の準備期間

- ①実習を行う前から不安と敗北感が漂っている。
- ②検便が集まらないなど、事前準備の不備。
- ③提出書類が整えられない。
 - 1. 誓約書、同意書、個人票。計画表・日程表など、説明を聞いて書き込むことができない。
 - 2. 園の概要。方針、園のきまり、園児・児童数、職員数（パンフレットやWEBから書き起こす場合がある）。
 - 3. 巡回連絡票（巡回指導の担当教員に提出）を提出する意味を理解していない。
 - 4. 該当のクラスの子どもの発達を「三歳児なら」「四年生なら」と事前に把握していない。
 - 5. 対象年齢により事前の準備をしない。発達の様相、指導案、季節の活動、折り紙など。
 - 6. 気候や季節に合わせた準備ができない。

(エ) 実習中の諸問題

- ①あいさつ
 - 1. プロとしての「表情を作る」ということに抵抗がある（ありのままが良いという奇妙な自信がある）。
 - 2. 自己紹介の準備の不足。TPOを考えられない。職員、集会、教室で子ども、保護者などへの挨拶が具体的に準備できない。発声や音量の不適切。
- ②体力
 - 1. 睡眠時間を確保できない。一日の生活時間の適切な配分が難しい。
 - 2. 休日を活用できない。一週間の計画を立てられない。
 - 3. 保育・用離縁実習は二週間、小学校教育実習は四週間。体調の管理不足が体調不良による欠席に結びつく。
- ③持ち物、身だしなみや服装など
 - 1. 印鑑、服装、アクセサリ、カラーコンタクト、腕時計、ピアス、ピアスホール、化粧など適切な準備ができない。
 - 2. 履物、運動靴と体育館シューズを準備しない。安全や子どもの心理についての理解の不足。
 - 3. スマートフォンの使用方法が不作法である。自分の所持品の管理ができない。
 - 4. 時間を守る姿勢がない。自分が「先生」と呼ばれて、お手本とされることについての自覚

できない。

5. 控室での過ごし方が不作法である。使用後の清掃や整理整頓ができず、担当職員への挨拶ができない。

④連絡

1. 出席簿への押印の習慣がない。
2. 欠席時の連絡ができない。無断欠勤する（安易に追加の実習を依頼する）。
3. 連絡が取れない（知らない人からの電話に出ないという習慣を身につけている）。

⑤観察実習

1. 観察記録が書けない。日々の記録が書けない。棒立ちのままになっている。
2. メモの取り方が分からない。あるいはメモを取るだけに夢中になってしまう。
3. 子どもとかかわりながら観察するということが分かっていない。
4. 保育園ではなるべく小さな子の保育を経験させたいが、子どもの変化や成長をつかむことができないので、毎日を単調なものとしてしか感じられず、「記録することがない」と思い込んで苦勞する。一方で、幼稚園では行事や活動が時間で区切られているため、それを書き写すことが観察だと思い、「記録がとりやすい」と思っているケースがある。

⑥責任実習（半日が1回、全日が1回）

一日の案が策定できない。指導案が書けない。困り果てて大学に電話で相談してくることがある。その内容は「何をしたら良いか」「明日の準備はどうするか」「記録が書けない」「指導案が書けない」といった相談。また、「実習先の人間関係が悪い」「園長や担任が悪い」「いじわる」「方針が合わない」「恐怖を感じる」など、実習先への批判。聞いてみるとせっかく熱心に指導して下さることへの誤解に基づくものが多い。さらには「自信がない」「適性がない」「資格がない」「ただ泣いている」「もう行けない」などといった自己否定感が強い。

⑦環境構成が書けないなど日々の書類が書けず提出ができない。

⑧小学校実習の場合、板書やこどもへの対応、控室での姿勢などの問題が予想される。

(オ) 実習後

- ①実習のまとめを期日までに提出しない。
- ②書類など取りに行くべきところを「送ってください」と気軽に頼む。
- ③礼状、書き方、郵便、切手についての認識不足。「切手を貼るの?」「いくら貼ればいいのか?」「手紙の折り方が分からない」。
- ④実習のまとめや礼状をネットからコピーアンドペーストする。封筒、宛名、時候の挨拶。例文から丸写しにした季節外れのあいさつ。
- ⑤出席簿や評価表は郵送されてくるが、個人票が送られてこないことがある。
- ⑥給食費の払い忘れ。
- ⑦欠席による実習不足の日数について再実習のお願いを相談なく行う。

4. 問題点への対応

当然のことながら、予想される問題点については事前にくどいほど繰り返し指導している。

しかし学生の中には、自らの将来につながる実習にすら「やらされ感」を強く感じていることも事例から考えられる。

しかも、教育実習を構成する要素を考えると、教室で学んだ座学や実技に加えて、一般社会や教育現場での「実務」が一度に加わってくるため、そうした観察や保育教育以外の要素にあらかじめ打ちのめされてしまっている事例もあるのではないかと考えられる。

そこで、次のような方法で負担感の軽減を図る一方、実習の核心である「観察力」「実践力」の向上に向けての方策を実施することが必要であると考えた。それらの実施には、指導する教員の側の意識の転換や学生理解の深化が求められていることはいままでもないことである。

(ア) マニュアル化など

このため、第一にマニュアル化、行程マップ、チェックリスト、タイムスケジュールを作成する。これは「実習の手引き」あるいはその補助的な資料の見直しや追加で対応することとする。これにより、時間管理、郵便物の扱い方とか電話のかけ方受け方を始め、定型化できるものについての説明を分かり易くして、自信を持たせるまでは行かないとしても、無駄な悩みを和らげ不安を解消することとする。

よく言われる「郵便物に切手が必要だと思っていない」「電話で話せない」などは、指導者にとっては常識外れであっても、実は学生にとっては経験したことが無かったり禁止されてきたりしてきたことなのである。学生は、LINE でやりとりはするが封筒で郵便物を出した経験は少なく、受け取る郵便物などには切手のないものが多い（我々が受け取るダイレクトメールの大半には切手が貼られていない）。また、スマホなどの電話マークの意味（☎や☎）を知らない世代の学生は、知らない人からの電話には出ないという教育を受けている場合もある（そのため就職活動で企業担当者がかける電話に応じない学生が増えているというニュースがあった）。仲間内でさえ音声会話が減っている現状にあって、「自分でよく考えて電話しなさい」という指導は、学生にとっては了解不能であるかもしれない。大人の世界に入ろうとしている学生にとって、実習を契機にどっと押し寄せる未知のあれこれは、そこに足を踏み入れることをためらわせるに十分奇異なものだろう。そうしたことについて、指導者の理解が求められていると考える。

(イ) 履修事項をポートフォリオとする

第二に履修ポートフォリオ作成により、履修事項を復習できるようにする。

例えば、ピアノや手遊び、折り紙などのレポトリリーを「ポートフォリオによる見える化」して自信と自覚が持てるようにする。また「手遊び」の場合年間で30以上の実習をしているが、それが実力として学生自身が自覚しているのかは疑問である。誤解を招きそうだが「身につけていない」というのではない。学生が「自覚しているのか」という自己認識を問題としている。言い換えれば「自分の身につけていることを忘れてしまっている」のではないかということである。

そのため、実習に生かすことができるスキルが失われてしまっている。履修して身についた実力をポートフォリオで振り返ることによって自己認識を深めることは自信の醸成に大きな意味を持つ。

ポートフォリオは、単位取得と座学系、作品系、運動系、実習準備（子どもとの関わり記録および実務系）などが考えられる。これらは必ずしも紙などではなく、写真や動画、電子ファイルでの作成も視野に入れる。

これまでもこうした指導は繰り返し行っているが、定着していないので単位に絡めて必ず作らせるようにすることが必要かもしれない。

(ウ) ICT (Information and Communication Technology) の活用

課題や注意事項のビジュアル化と PC 用スマホ用の PPT (Power Point) による配布など ICT の活用が負担を軽減すると考える。またそうした方法を使つてのプレゼンテーション能力の向上も図ることとする。

ここでも、上で述べたような学生の生活様式が変化しつつあることに注目する必要がある。

掲示物、展示物によって日常的な注意喚起を行うことが望ましい。「知らない」「聞いていない」という学生の情報受容習慣は、我々が経験したのものとは違うものであると考えられる。こちらが話したり伝えたりしたとしても、学生とのチャンネルが食い違うために「聞いていない」といえるような状況である可能性も考慮に入れたい。学生が情報を受け取りやすいように工夫する中で、そこを第一歩として次の段階に進めるような道筋を構想することが必要と考える。

次に述べる観察力の向上に向けても VTR や ICT の活用が効果的ではないかと思われるし、プレゼンテーションの能力開発を通じて、見る力、書く力の向上を目指したい。有形無形のビジュアル化を考慮する必要がある。

(エ) 問題は「観察力」

これまで述べてきた方策により学生の負担を軽減する一方で、実質として最も意味がある課題は観察力の醸成である。

実際のところ、実習における最初のつまずきは「観察記録」を書くことにある。そのため実習指導を担当する教員はその練習を何度も繰り返し指導している。

それでも観察記録を書くことに困難を感じ、実習を辞退してしまう学生がいる現状について、教材、指導方法、学生の理解状況について調査し研究していく必要がある。

5. おわりに

本稿では各種の実習における問題点を列挙した。社会的な物事に取り組んだ経験の少ない学生にとって、実習は相当に深刻な課題である。アルバイトなどの経験があっても、そこは服務や職務がマニュアルで書ききれぬ業種の場合、参加することへの負担感は少ない（少ないように設計されている）。また、年齢の近い同僚がいて、それを真似れば出来るということへの安心感がある

し、万一自分に合わないと思えば簡単に離職することができる。

ところが専門職として必須である教育実習ではそうは行かない。見ること、書くこと、考えることが要求される上、期間や単位、免許の規定があるので軽い気持ちでは参加できない。またそうした状況を理解させようとして、叱咤激励することがあるいは一層の不安をもたらしている可能性もある。重圧感を感じさせる要素に満ちているといえるのである。

そうした中で実習がうまくいくかどうかの鍵は、最初に行う「観察が出来るかどうか」にあると考える。これについては、今後工夫していくことが必要であり、学修のありかた自体の検証と改善が求められている。

いずれにしても学生がなんらかの糸口をつかんで、予めの敗北感を抱くことなく実習に臨むことができるようにしたいし、不安はあっても、明るい表情で元気に実習に臨めるよう指導に工夫をこらしていきたいものである。

本稿作成にあたって、事例の提供などご協力いただいた皆様に感謝を申し上げたい。

【参考文献】

- (1) 文部科学省：小学校指導要領 2008
- (2) 文部科学省：教職実践演習について
- (3) 東京都教育委員会：小学校教職課程学生ハンドブック（平成 29 年度版）
- (4) 深見俊崇：1 年次における教員志望学生の授業観察力量を向上させるためにカリキュラムデザイン 日本教育工学会論文誌 39 (3)、201-208 2015
- (5) 名古屋経営短期大学：幼稚園教育実習の手引 2016
- (6) 名古屋経営短期大学：保育実習の手引 2016